



青春の火は燃ゆ

2018国際ゴールドマスターズ奈良大会 陸上は世界新2、 日本新27が誕生

マスターズ・イベントの本年度最後を飾る水泳・陸上合同の「2018国際ゴールドマスターズ奈良大会」は10月27、28日の両日、大和路を舞台に開かれた。水・陸の愛好者が交友を深め、同時に競技する行事は京都大会以来、5年ぶり。陸上は「ならでんフィールド」(奈良市鴻ノ池競技場)で7カ国992人が集い、意義のある汗を流した。誕生したレコードは世界マスターズ新2、日本マスターズ新27、大会新100、同タイ3と記録ラッシュに沸いた。

お見事、MVPの鈴木さん W70・やり投29m03の世界新

狙っていた。静かにやり投の助走路に立った鈴木昌子さん(72歳・静岡)。500gのやりを手を助走を起こし、「やっ!」とばかりにフィニッシュ。空中に浮いたやりが落ちた地点が29m03。世界マスターズ新だ。

これまでの世界記録は2018年9月の世界マスターズ大会で27m95が出ていた。鈴木さんの一投はこの記録を上回った。

鈴木さんは2回目の試技に「一発」を懸けていた。やりを放った瞬間「いった!と、手応えを感じた」という。大和路の大会に意欲を燃やしていたのは、1週間前に地元で行われた静岡マスターズ大会で26m台を投げていたが「修正する箇所があった」と、左足に体重を掛けての助走などを細かくチェックし、奈良大会に備えてきたのだ。

十分な調整をし、自信を持って臨み、結果を出した。「29m台は納得です」と鈴木さん。中学校の教諭を振り出しに、小学校では管理職として勤め上げた。マスターズ陸上には54歳のときの01年、地元であった静岡マスターズ大会に出たことがある。が、運悪くアキレス腱を痛め、あらためてマスターズ陸上への参加を再開したのは60歳から。この年の記録は28m03だった。

以後、64歳で34m64のW60の日本記録をはじめ、W65、W70の27m79と3

クラスの記録を樹立。今回、自身のW70の記録をさらに伸ばした。かつて旧姓・土田の日本大時代、1965年の日本インカレで3位に入賞。43m55のベストを持っていた。

今はご主人と健康のために体を動かし、ご本人はやり投に焦点を当てている。女子MVPに輝いたヒロインの信条は「自分への挑戦」だ。

沸きに沸いた特別レース 夢の記録は水泡に帰したけど

好天に恵まれた最終日の10月28日、メインスタンドがほぼ埋まった。午前9時に始まるエキシビジョンレース(男子特別レース)の4×100mRを見るために足を運んだ人たちが。参加は2チーム。4レーンにドリーム・チーム、3レーンにM85・ゴールドチーム。

スタンドのお目当ては1走から武井壮さん(45歳)、譜久里武さん(47歳・沖縄)、佐藤政志さん(46歳・新潟)、朝原宣治さん(46歳)のドリーム・チームだ。カルテットが姿を現すと歓声沸き上がった。すごい人気だ。

人気タレントとしておなじみの武井さんがスタートラインに立つと、再び歓声と拍手。手を挙げて応える武井さん。「オー」とか「ハー」とか、大声を発して気合を入れた。チームの狙いはM45(45~49歳)の部の世界記録(43秒42=英国・1999年)更新だ。

9月の世界マスターズではこの顔触れで挑んだが、43秒77と0秒35届かなかった。「今度こそ」が4人の合言葉だった。

さあ、再挑戦の火ぶたは切られた。1走の武井さんは気合どおりの好走をし、2走の譜久里さんへバトンパス。譜久里さんの100mのベストは45歳のときの11秒11。譜久里さんも力走して、佐藤さんへ。しかし、テイクオーバーゾーンでバトンパスが途切れてしまった。ぼうぜんと立ちすくむ朝原さん。

100m10秒02(01年)の記録を持つ朝原さんの走りは見られなかったが、スタンドからは大きな拍手が送られた。武井さんは「残念です。観客の皆さんに勇気づけられ、良い雰囲気だった。いつかは“世界記録”を実現させ、皆さんに喜んでもらいたい」と話し、朝原さんは「またの機会に良いニュースを届けたい」と前向きだった。4人に送られた観客の拍手が鳴りやまなかった。

副産物はM85のチームに 堂々の世界新を樹立

ドリーム・チームと一緒にレースしたM85のゴールドチーム(混成)は思わぬうれしい成果につながった。石田保之さん(88歳・栃木)、田中博男さん(87歳・青森)、益田斉さん(86歳・神奈川)、石川董さん(85歳・岩手)とバトンが渡り、割れんばかりの拍手の中で石川さんがフィニッシュ。

なんとタイムは1分07秒03と、目標の1分08秒50を上回ったばかりか、世界マスターズ新記録の誕生となった。M85の4×100mRの世界記録は、18年5月29日現在でドイツの1分40秒52だ。それ以降、ドイツがさらに短縮するタイムで走っ



世界マスターズ新記録を樹立したM85のゴールドチーム(混成) 写真/日本マスターズ陸上競技連合

た、とのニュースもあるが、日本のカルテットのタイムは間違いなしの新記録だ。「ドリームと一緒に走れ、あの観客の拍手に励まされたのが効いた。特別レースに出られたことを感謝したい」と口をそろえた。ドリームに引っ張られて、刺激を受けた副産物といえよう。

個人レースでも 目を見張る田中さんの快速

M85のゴールドチームで健闘したカルテットの皆さんは個人レースでも“さすが”の成績を上げた。M85・60m(-2.6)は2走の田中博男さんが10秒06でトップ。2位は10秒50で4走だった石川董さん。3位に1走の石田保之さんで11秒04。4位が3走の益田斉さんで11

秒41と上位を独占した。そろって大会新だった。

すごかったのは田中さんだ。どの大会もそうだが、胸をすくような走りスタンドの目を集めている。9月のマラガでの世界マスターズ陸上で100m、200m、400mを制した勢いを奈良大会でも見せてくれた。

60mのほか、100m(+0.8)は15秒44の大会新、200m(0.0)が34秒09、400mも1分22秒63の大会新で走り抜いた。さっそうと2位を引き離して走る姿は、とても87歳とは思えない。元小学校の先生は独特の体操、筋トレで体幹を鍛え「いつでも速く走れる」体調に仕上げている。「これからもしっかり走りますよ」の張り切りようだ。

W75 クラスの立五段跳で 見事に雪辱した渥美さん

W75クラスの立五段跳で注目された渥美裕子さん(75歳・滋賀)と秋田ソノ子さん(79歳・奈良)の跳び合い。9月の全日本マスターズ陸上では秋田さんが8m88で、渥美さんの8m63を抑えた。

いずれも日本新だった。が、今回は渥美さんが1回目に8m64でリード。ラスト4回目にさらに8m71と記録を伸ばして雪辱した。秋田さんは8m51で2位となった。

渥美さんの記録は秋田さんが5月に出演していた8m86の公認日本記録には及ばなかった。

ご両人はW75・60m(-1.1)でも顔を合わせ、こちらも渥美さんが10秒04の大会新で、秋田さんの10秒95を上回った。「やった!」と、ご機嫌だった渥美さん。ただ、秋田さんは大会の裏方さんとして、こまめに動き回っていて、調整十分でなかったようだ。

この2人に声を掛けて励ましていたのは、こちらも大会裏方に精を出していた狭川富美さんだ。狭川さんは渥美さんの後輩に当たり、京都・光華学園の高校の出身。高校時代に五種競技で4168点の当時の高校記録を1965年の日本選手権(2位)で出したほどの選手だった。競技が終わった後はそれぞれの選手の労をねぎらっていた。(以下、次号に続く)

前号の続き・全日本マスターズ鳥取大会

M45・走幅跳の松原さんに MVP

男子のMVPを獲得したのは11月号で既報の通り、M45・走幅跳で6m64(+1.3)の日本マスターズ記録タイをマークした48歳・愛知の松原憲治さんだ。

「調子は悪くなかった。記録が出たのは最後の試技の4回目でした」と松原さん。マスターズ陸上の走幅跳・三段跳・立五段跳の試技数は各クラスのトップ8を決めるまでは3回とし、トップ8が決まった後は1回だけだ。松原さんは「きょうは6m80ぐらいは跳べそうだったのに」と残念がった。

松原さんは名古屋市の愛工大名電高のとき、走幅跳で7m27(1988年、高校ランク全国13位)を跳んでいる。豊田自動織機に勤めながら陸上を続け、実業団でも活躍。7m47を跳んだときもある。6m64は2年ぶりの自己タイだ。45歳の時点で出した。来年は49歳とM45クラスでは不利な条件となるが、さらなる

記録の更新に燃えている。

全日本マスターズ陸上と重なるように大阪で行われた全日本実業団対抗陸上の男子走幅跳に7m84のベストを跳び、1位となった子息の瑞貴選手との二重の喜びとなった松原さん。喜びを糧に親子でまい進する。

年の功を發揮しました

M95・立五段跳で5m40の日本新を記した廣瀬弘さん(富山)は95歳。M90・3000mWを28分15秒65の大会新でゴールへ入った白樫平八さん(兵庫)は90歳。W90・やり投に6m98の日本新を出した北島喜美さん(徳島)も90歳。

W85・立五段跳で6m55のこちらも日本新の辻ミツエさん(奈良)は89歳と、高齢者の皆さんが健闘。「年齢なんて関係ない。まだまだ元気」と年の功を發揮した。なお、M100・100mで100歳を超えている富久正二さん(広島)は43秒87(+0.5)と、宮崎秀吉さん(京都)の持つ日本記録29秒83には及ばなかった。

五輪、世界選手権の 選手たちも活躍

北京五輪の女子マラソンに出場した中村友梨香さん(32歳)はW30・100mH23秒91の2位、走幅跳3m59で1位(共に風速はぶく)、やり投10m84の4位。2001年世界選手権の女子10000m代表だった小崎まりさん(43歳)は5000m17分37秒48で1位。いずれも兵庫の所属として出場した。

M25・60mの 1組のレースは無効

日本マスターズ陸上競技連合は10月23日に三役・常務理事会を開き、9月に鳥取市であった全日本マスターズ陸上競技選手権の男子60m・M25の1組のレースを無効とし、記録公認申請はしないことを決めた。1組出場者には了解を得るとし、同クラスに順位は付けられないことで再度調整する、とした。